

イギリス文学センチメンタルジャーネイ その4

David Copperfield 少年の足跡を辿る

齋藤 和夫

London~Rochester~Canterbury~Dover



Part 1

David Copperfield (ディヴィッド・カプフィールド) に就いて

Charles Dickensの半ば伝記的作品とされるこの小説は、必ずしも作家の前半生を忠実に辿っている訳ではない。所々に彼と所縁のある人が描かれているし、また彼が体験したことも出てくるが、伝記に囚われて失望する読者もいるだろう。

それよりも、David少年或いは青年を巡る多種多様な人間を万華鏡を見るようにしてその一挙一動を楽しみながら読むほうが、もっと楽しく読むことになるだろう。

この意味では、この作品は作家の出世作『ピクニック・ペーパーズ』の延長線上にあるよう

だ。とくかく良い意味でも悪い意味でも面白い人物が目白押しといった観がある。これがこの小説の愛読者が多い理由だろうと思う。

さて、少年がLondonからDoverまで辿った苦難の旅に入るまでの経緯(いきさつ)を一瞥したい。

Londonの北東約100マイル、Suffolk県のある町でDavidは生まれるが、生まれた時には父は既にこの世に無く、若い母と子守女のPeggotty(ペゴティ)に育てられた。それから数年して母はMurdstoneという男と再婚するが、これが紳士の仮面をかぶった悪人で、自分の姉をこの家に引き込み、二人で家の実権を握り、口では尤もらしいことを言いながら、邪魔者のDavidを虐待し、物覚えが悪いと鞭で打ち据え、耐え兼ねたDavidが自分を押し返している手を齧り、London東南郊外のSalem塾に送られる。そこで出会ったのが上級生のSteerforth(ステアファース)であり彼との交情がこの小説のポイントの一つになっている。やや一年後に母が亡くなり、主人公は継父が経営する酒店の小僧にされて屈辱に満ちた境遇となる。ここでMicawber夫妻と同居することになる。この夫妻はお人好しでいつも借財に苦しみ、一度は債務者監獄にはいたりして、Davidはこの一家のために色々と手助けし、互いに気心が合う仲になったが、この一家が転居した後、何時までも小僧生活では先が思いやられて、Doverに住む大伯母のBetsy Trotwood(ベッツィ・トロットウッド)に相談しようと店から逃亡して旅に出ようとする。Micawber氏もこれから何回も登場するが、作家の実父がそのモデルとなっている、と言うのが通説である。

Part 2

LondonからRochesterそしてChatham (チャタム) まで

Londonのテムズ川南岸の債務者監獄 (King's Bench Prison) の周辺からDavidの苦難の旅がはじまる。宿から荷物を運び出してDover (ドーバー) 行きの乗り合い馬車の発着場まで運んで貰うように頼んだロバ引きの男に、荷物と折角Peggottyに用立てて貰った半ギニー銀貨までそっくり持ち逃げされて、残ったわずか3ペンスでDoverまで歩かなければならなくなったDavidは、Old Kent Road (ケント街道)・New Cross Road (クロス街道)・Blackheath Road (ブラックヒース通り)と歩み続け、つい数カ月前までSteerforth達と学んだSalem House (セイルム塾) の干し草堆で旅の第一夜を過ごす。着ていたチョッキは既にケント街道の辺りで9ペンスで手離し、まだ悲惨な境遇が身に浸みていなかったが、翌朝歩き出してDover Road (現在ロンドン市内ではRochester Roadと呼ばれているのがそうであろう) に入る。その日は日曜日とあって教会のミサが聞こえ、静かな町のたたずまいの中を独り歩く自分の姿を思って心が挫けそうになるが、絶えず彼の眼前に浮かぶ母の面影を支えにして歩き続け、約23マイル (40キロ弱) 歩いてRochester (ロチェスター) の橋を渡ってChatham (チャタム) に入り、メドウエイ川の岸の砲台の陰で眠る。この辺り描写は、

作者が幼時過ごしたただけあって、極めて写実的かつ印象的である。

メドウエイ川の北岸がRochester、南岸がChathamで、一つの町が川で分けられた形である。Chathamは港町、Rochesterは聖堂の町であり、なにかしら二卵性双生児の感がある。そしてRochesterの方にDickens所縁の建物が多い。駅を出て右に進むと200メートル程でDickens Centerがある。赤煉瓦のがっしりした建物に看板が下がり、これが彼のどの作品の何処に出ているかを記したplaqueが壁に付いている。さらに100メートルも進むとギルドホールがあり、ここにもこの建物が作品の中で使われている事が記されている。作家のシルエットが印象的である。その直ぐ向かいにRoyal Victoria and Bull Hotelと仰々しい看板のホテルがある。これも作品に登場するが、もともとの名前がBull Innだったのが、ビクトリア女王の宿泊の栄に浴して、それから今の名前に変えられたという。その裏手にロチェスター大聖堂がある。ロマネスクというのだろうか、Englandではあまり見掛けない様式である。たまたま私が通りを歩いていると、突然聖堂の鐘が鳴り響き始めた。Dickensもこの鐘の音をよく聞いていたのだろうか。なにかしらタイムトンネルを通過して彼の時代に戻った感がする。

Chathamは古くからの海軍の根拠地であり、有名なドレイク提督もこの港で船乗りの訓練を受け



Chatham 港の風景



Dickens Centre, Rochester

たというから、16世紀以前に遡る軍港である。作家の父親は海軍の下級官吏であったが、作家の幼時にここで働き、恐らくナポレオン戦争の終結のためにその職を失ったのであろう。この後一家はLondonに移り、貧窮に苛まれることになる。Dickensの懐かしくも惨めな思い出の町なのである。

Part 3

Chatham～Canterbury～Dover

再びDavidの旅に戻ろう。翌朝、Davidは上着を金に換えようとする古着屋に入るが、上着を18ペンスで引き取ってから、他の品物と交換だと言い出し、なんのにかんと難癖を付けて、泣きながら粘りに粘ってやっと16ペンスを貰い、その晩も干し草の中で眠り、翌日は、街道で出会った酔っ払いの鋤掛屋に無理やりハンカチを奪われ、それからはそんな感じの大人を見ると物陰に隠れるようにして、恐怖におののきながらCanterbury（カントベリー）の町を通りすぎる。この時の彼の心境は、

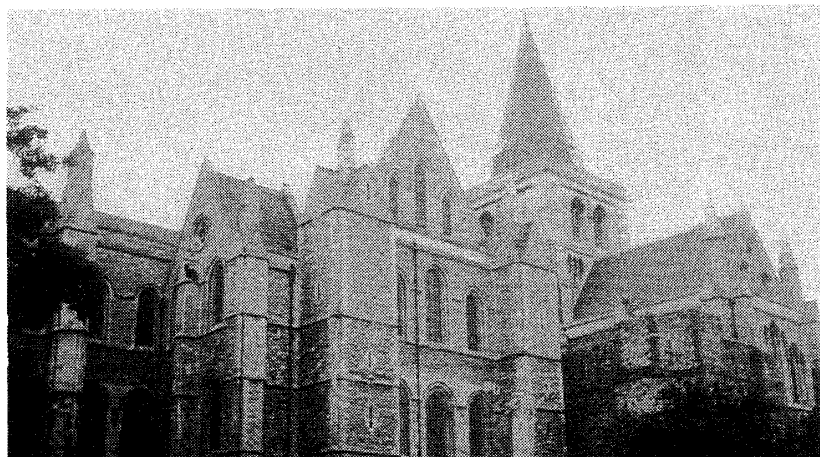
But under this difficulty, as under all the other difficulties of my journey seemed to be sustained and led on by my fanciful picture of my mother in her youth, before I came into the world. It always kept me company. It was there among the hops, when I lay down to sleep; it

was with me on walking in the morning; it went all day before me. I have associated it, ever since, with the sunny street of Canterbury, dozing as it were in the hot light; and with the sight of its old houses and gateways, and the stately, grey Cathedral, with the rooks sailing round the towers.

（しかし、旅の間の諸々の困難と同様に、この困難の下でも、私の母の若い時、私が生まれる前の母の幻が私を支え導いてくれるように思われた。その姿がいつも私と共に歩き、私がホップ畑の中に眠る時もそこにいて、朝歩き出すと共にいつも私の前を歩いていた。ずっと私はその幻と共にあり、暑い太陽の下でうとうととしているようなCanterburyの通りでも、また、この町の古い家や戸口をみても、塔の回りを白嘴カラスが舞う、堂々とした灰色の大聖堂を見ても、私には母の幻が浮かぶのであった。）

悲惨の極点の状態でこの町を通り過ぎた彼は、この後この町のDr.Strongの塾で学ぶことになるが、あの時の自分の姿を誰かが見ていたのではないかと、暫く心落ち着かなかったのである。

Londonを出て6日目にやっとDoverの町に入るが、まだDavidの受難は終わらない。半ば裸体に近い姿で、飢えと疲労のために息絶え絶えになっ



Rochester 大聖堂

て、彼はあまり判然としない伯母（大伯母）の家を探し回るが、水夫達にはふざけた返事で翻弄され、店屋ですげなく追い払われ、途方に暮れていたところ、貸し馬車屋にその家の方向を教えられ、その上親切にも1ペニーを恵まれる。旅の始めからそれまで大人の強欲と意地悪に散々悩まされてきたDavidにとって、この人だけが救いであった。この旅の物語に出てくる大人達の酷薄さを通してDickensは何を語りたかったのだろう。

新約聖書ルカ伝第10章に出てくる有名な『善きサマリア人』の譬えは、現実にはこのような善根の人が極めてすくないことを暗示している。おおかたは不幸に陥った弱い人をかさにかかって苛める人であり、それが人間の業（ごう）なのだと言いたいようだ。これがDickensが幼時から経験し、また不断の観察から彼の人間観の一部となっているようだ。例えば『オリバー・ツイスト』に登場する孤児院の大人達の酷薄さにもそれが克明に描かれている。概して彼の小説の中には『善きサマリア人』がすくない。別な観点からすると、これがDickensのビクトリア時代の世相に対する悲観論の具体的な表現とも考えられる。

さて、Davidは貸馬車屋に教わった通り、丘に上る坂道を暫く歩き、とある店に入って尋ねようとすが、折よくAunt Betsyの小間使いが居合わせ、その後についてやっと伯母の家に辿り着き、伯母の手厚い介抱を受けてやっと人心地がつく。

彼の所在を知ったMurdstone姉弟が取り戻しにやってくるが、伯母は母子に対する二人の虐待を責め立てて追い返す。この日から彼の新しい未来が開けてくるのである。

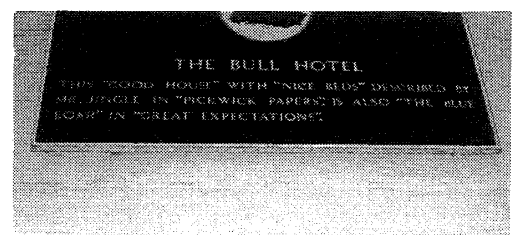
Londonのウォータルー東駅で列車に乗ると約2時間でドーバー・プライオリに着く。駅で簡単な市街地図を貰い（大抵の駅にその町の市街図が用意され、10ペンス位で入手できる。）駅から出ると、数台のタクシーが客待ちしていたので、『Dover城へ』と声を掛けた。うっかり『キャッスル』と発音したら、運転手は一瞬戸惑った顔をしてそれから『カーズル』と聞き返した。私が『そうだ』と言うのを聞いてから発進した。どうも彼等はアメリカ発音は聞き慣れないらしい。それとも私の英語か？

城に上る坂道の途中に入場料の徴収所があり、1ポンド払ってさらに登ると、丘の上の広場に出る。丘の上の広い台地が胸壁に囲まれて、その中に幾つかの建物が散在しているが、中心は古びてはいるが堂々とした石造りの、日本でいえば本丸といった建物であり、天辺に翻るユニオンジャックが印象的である。

また、どうしてこんな不便な所にと不思議に思ったのが、今でも使われている教区教会の建物、それに寄り添うように立っている、半ば崩れそうだががっしりしているローマ軍遠征時代の灯台などが目を魅いた。



Royal Victoria and Bull Hotel



Hotelの壁のPlaque

ローマ軍のブリテン征服は、単なる侵略ではなく、ブリテン島がローマの文明圏に取り込まれたという意味を持っている。ローマ字が言語表記に用いられ、軍の移動のためにRoman Roadが各地に開発されて（その一部は今なお使われている）島内交通が発達し、やがてはキリスト教伝来への道が開かれる遠因となった。今イングランドで完全な姿で残っているローマの遺跡は、この灯台と、はるか北のはずれスコットランドとの境の南側にあるハドリアンの長城だけであろう。この意味で、この灯台は、昔海を照らして船を導いたばかりでなく、今も英国の歴史を照らしているのだ。

この城を訪れている客は決して少なくないと思われるが、この広い台地では、混雑している感じはまったく無く、あちらこちらで静かにゆったりと眺望を楽しんでいる。南の方Dover海峡を眺めると、微かにフランス海岸が見えるような気がするが、濛気に妨げられて輪郭がはっきりしない。今は静かに横たわっているが、この海峡は第一次、二次大戦の英国防衛線として、英独両国のせめぎ合いの場であった。何時かの新聞で、この城の地下深く造られていた強固な要塞が撤去されたと報じられていた。考えるとこの国は、スペイン艦隊の来襲、ナポレオン戦争、両大戦と、幾つかの国難を辛うじて潜り抜けてきた国なのである。

視線を下げると、Doverの港が見える。W.H. Auden(オーデン)はこの港を『構築された入江(a

constructed bay)』と詠んだ。まだ英国を訪れなかった時には、この言葉が何を意味するのか理解が難しかったが、英国各地の港を見て、防波堤を突き出して造った港が極めて少なく、大きな河川の河口がそのまま入江を成しているのを知り、Dover港がむしろ例外であることを知った。実地を見ないでイギリス文学を理解したつもりで、どれだけ学生に嘘を教えているのか、思うだに背中に汗が出る。

この城で暫くあちこち眺め、ヴィジターセンターでこの城の歴史を語る映画を見て食事と買い物の後、丘を下ってDoverを散策する。

まず真っ直ぐ南に向かい、海岸に出て道路を西に向かい、港湾地帯に入り、それに沿う幅5メートルほどの道をさらに西に進んで港と海を左に見て歩くと、何軒かの釣り道具屋が並んでいる。そのウインドウには大和だの菱美だのとやたら日本製の品が並んでいる。『釣り道具よ、お前もか』Londonの市中で、Canonだの、Nikonだの、Casioだのと、日本製品を飽きる程に見てきた今、日本製品を誇る気持ちよりも、日本製品に押されて産業の衰微を招いている英国の労使双方の、そしてその家族達の怨念を思って、背筋が寒くなる思いである。

暫く歩いて有名なドーヴァーの白い崖の写真を何枚か撮り、踵を返して、崖の切れた所で左折し、今度は北に向かう。この辺りの地形は、この町が



Roma人の造った灯台



Doverの港 (a constructed bay)

よく出るDickensのもう一つの小説『A Tale of Two Cities (二都物語)』のなかで、次のように描かれている。

The little narrow, crooked town of Dover hid itself away from the beach, and ran its head into the chalk cliffs, like a marine ostrich.

『曲がりくねった狭いドーヴァーの町は、浜辺から身をかくして、まるで駝鳥のように、頭を白亜の断崖に突っ込んでいる。』(中野好夫訳)

北に向かって歩く私の左手の台地は、海の際で白い崖になるのだが、どうも高台の住宅地らしく、何本かの登り坂で開けている。『David Copperfield』の貸馬車屋がDavidに教えた言葉に従えば、この台地のうえに伯母Betsyの家があると設定されているようだ。Dickensはこの町がお気に入り、地形を諳(そらん)じているようだ。

Part 4

再びCanterburyへ

伯母の家ですっかり元気を回復し、伯母の食客(いさろう)のやや頭のおかしいMr.Dickとも親友になって落ち着いた頃、伯母は学校に入ることを勧め、その翌日にはもうCanterburyに連れて行き、そこで弁護士をしているMr.Wickfield(ウィックフィールド)を訪れ相談の末、この家に寄

宿してDr.Strongの塾に入ることになる。

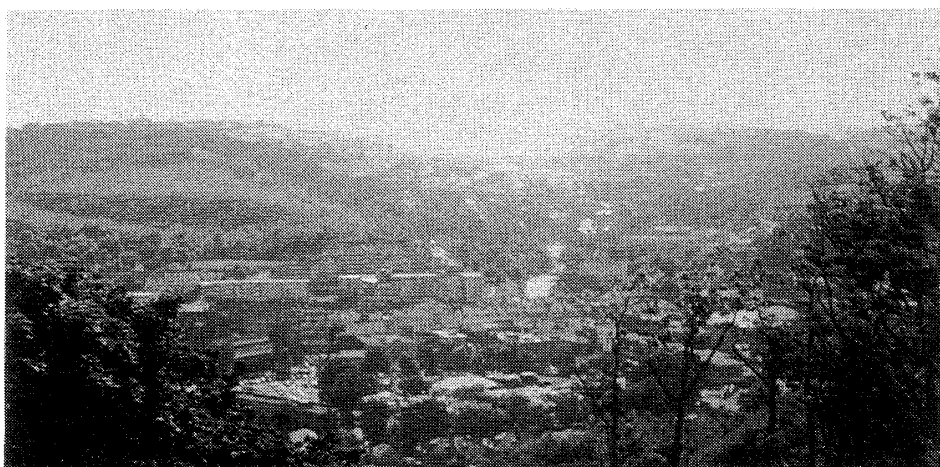
Wickfield氏は妻に先立たれ、娘のAgnesと二人暮らしであるが、他に事務員のUria Heepがいる。Davidがこの若者と握手した時の印象は。

『だが、ああ、なんという冷たい、ぬらぬらした手だろう！ 見た目もそうだったが、触ってみても、まことに不気味な感じだった。私は、あとで、ごしごし両手をこすった。いわば暖めて、あの男自体を払い落とすために、そうしたのだった。』

Miss Agnesもこの爬虫類めいた男もこの後時々登場して、この小説の重要人物になるのである。

Dr.Strongの塾でも色々なことがあったが、Miss Betsyの愛情とWickfield父娘の好意とDr.Strongの指導の下で、概して幸せな学校生活だった。Canterburyの思い出は、懐かしく甘美なものである。彼を少年から青年へと育ててくれた町である。

My school days! The silent gliding on of my existence — the unseen, unfelt progress of my life — from childhood up to youth! Let me think, as I look back upon the flowing water, now a dry channel overgrown with leaves, whether there are marks along its



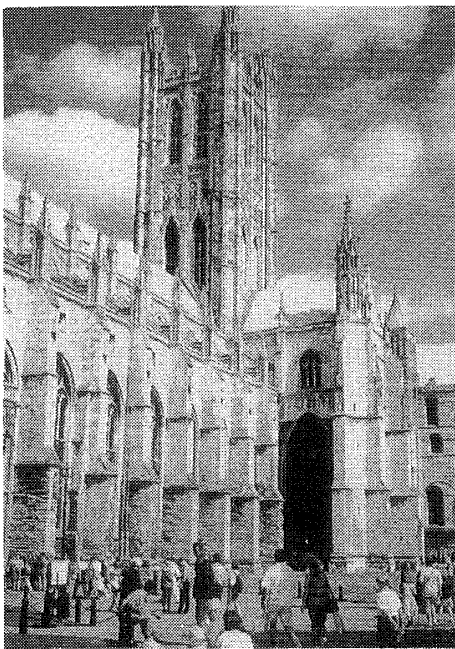
Dover 市街 (丘の左手辺りにMiss Betsyの家が設定されている。)

course, by which I can remember how it ran.

『それにしても、あの塾で毎日！ 少年期から青年期へと移っていった、あの静かな一時期——なんという、それは目に見えぬ、動くともない静かな生の流れだったことだろう！ 今にして振り返って見ると、もはや、それらは、ただ雑草に覆われた、水の川床に過ぎぬ。だが、それにしても、なお幾らかは、かつての流れを思わせる微かな跡ぐらいはとどめているかも知れぬ。それをひとつ訪ねてみたいのである。』

また、Davidの夢を育んだものは、あの大聖堂なのであった。

A moment, and I occupy my place in the Cathedral, where we all went together, every Sunday morning, assembling first at school for that purpose. The earthy smell, the sunless air, the sensation of the world being shut out, the resounding of the organ through the black and white arched galleries and aisles, are wings that take me back, and hold me hovering above those days, in a half-sleeping and half-waking dream.



Canterbury 大聖堂

『ちょっと待ってほしい。じっと目をつぶると、私は、あの大聖堂の中に座っている。そこは、毎日曜日の朝、私達が、そのために学校に集まり、皆揃って礼拝に行く場所であった。土臭い、日影一つ射さぬ教会内の空気、世界がすべて閉め出されているその感じ、そして、あのアーチ形になった、黒白単色の回廊と側廊に響き渡るオルガンの音、それらを思い浮かべるだけでも、私の心は、早くも遠い昔に飛び、あの楽しかった日々が、まるで半睡半醒の夢のように、漂い過ぎて行くのだ。』

この町と聖堂の思い出は、彼がここで出会った何人かの女性に対するそこはかたない恋の思い出とも繋がっている。

さて、この学校を終えたハイティーンのDavidは、伯母の配慮によって、人生修行の旅に出される。次の舞台であるLondonで、かつてSalem塾で兄貴分のように慕っていたSteerforthと出会い、連れ立ってPeggottyのいるGreat Yarmouthを訪れ、SteerforthとEmilyの悲しい恋物語へと発展して行くのである。

Part 5

私のCanterbury訪問記

Canterbury東駅で下車し、古い東城壁の上を右に向かって進み、その切れ目を下り2、3分も歩くともう聖堂の町である。その近くにChristopher Marlowe (クリストファー・マアロウ) が洗礼を受けた教会の跡がある。その標板が壁に付いているが、落書きで無残に汚れている。どこの国にも悪童がいる。しかし、考えてみると、マアロウ自身もかなり悪童だったらしい。わずか29歳で喧嘩(と見せ掛けた暗殺だと言う説もあるが)で殺されてしまった。だが、それまでに彼が世に出した作品は、ルネサンス期を代表するものばかりである。Dr.Faustus (ファウスト博士) は、ゲーテの『ファウスト』の先駆となる作品である。これが私の大学2年目のゼミ教材で、期末試験に出た問

題のかなりの部分がラテン語だったので難読したことを覚えている。

聖堂の周辺は商店街で、その雰囲気はまさしく東京浅草の浅草寺（せんそうじ）門前仲の町そのものであり、土産物屋、レストラン、その他色々な店が立ち並び、その通りを人々がそぞろ歩きしている。どの国も人間の集団であれば、町の成立の事情は変わらない。産業の町、学問の町、門前町、市場の町、行政の町、貿易の町、行楽の町などなど。

聖堂の信者席は意外に幅が狭く、奥行きがあって天井が高く、スリムな感じである。会衆の席数は200もあろうか、慎ましいなという印象を与える。門外の賑やかさと違い、しんと静まり返った雰囲気の中を、人々が静かに歩き回っている。

折悪しく、B.B.C.の撮影があるとかで、所々に立ち入り禁止の札が立ち、特にトーマス・ア・ベケット殺害の場所には入れなかったことは残念だった。1935年にT.S.Eliotの『Murder in the Cathedral（聖堂内の殺人）』がこの聖堂で上演されて、彼の詩劇への道の一里塚となったのだが。（この後門外の土産物店で聖堂のスライドを買ったが、その中にこの現場のものが2枚あったので、我慢することにした。）

聖堂の奥の庭にでてみると、外壁が修理中であった。見ていると、古い石を引き出して、新しい石をその跡に埋め込んで、漆喰で固めている。その繰り返しで実に悠長な仕事振りである。だが、

そうしながら年月を経ると、いつの間にかそっくり新しい建物に変わる訳だ。日本ならば、すぐ取り壊してきつさと改築するところであろうが、この仕事振りから英国人の粘り強さと気の長さと、原形をあくまでも崩すまいとする伝統尊重の精神を垣間見たような気がした。

門外に出ると、老若男女が依然としてそぞろ歩きしている。中にはソフトクリームを嘗めながらあるいている人も多い。『カンタベリー物語』の時代には、Londonからここまで少なくとも4、5日掛り、退屈を紛らすために、面白い話でもと、あの名作が生まれたのであろうが、現代の巡礼達にはその暇（いとま）も無く、列車やバスや自家用車でここに運ばれ、屈託ない顔をして聖堂詣でをし、門前町を冷やかして帰って行く。一人一人の心の中には喜びも悲しみも、不安も悩みもあるのだろうが、外から窺うすべもない。

聖堂に程遠くない街角に、『The Sun Hotel』と看板が掛かっている家がある。もっとも今は普通の商店であるが。説明によれば、Dickensの作品によって有名になった、となっている。DavidのCanterbury生活で宿屋が出てくるといえば、Mr. and Mrs.Micawberがここにやって来て、Davidと食事をした宿だけである。また、この町のDunstan StreetにあるThe House of Agnes HotelがDavidが寄宿した弁護士の娘Agnesの家とされるが、本来フィクションであるこの小説に実在のものがある訳は無く、LondonにあるThe Curiosity Shop



Christopher Marlowe 洗礼の場所

(骨董品店)と同類であろう。しかし、このこと自体この地のDickens人気の現れと言えよう。

The Sunの通りを少し歩くと、St.Thomas R.C. Church (聖トーマス・ローマ・カトリック教会)がある。勿論、ThomasはThomas á Beckettを記念している。彼が殺害されたのは、まだ英国がローマ・カトリックだった時代だから、この教会のほうが正統の記念教会だと言おうと思えば言える。しかし英国は面白い国で、ヘンリー8世によって取り壊された御霊屋が再建されて、Canterbury大聖堂の呼び物になっている。

英国に帰化したポーランド人作家Joseph Conrad (ジョセフ・コンラッド)は、帰化した後も一生カトリックを捨てず、最後はこの教会で沢山の人の出席のもとで葬儀が営まれ、カトリック共同墓地に埋葬された。私が行ったとき丁度ミサが始まる前であった、信者席は50位か、慎ましい教会だったが、大聖堂の真ん前で堂々とカトリックの宗教活動をしているのを見ると、カトリックが国禁の宗教だった時代を思い昔日の感がするのである。

Davidにとってこの町は自分を育ててくれた懐かしい町であったが、この町に苦い思い出しか持っていないもう一人の作家がいる。W.Somerset Maugham (W. サマセット・モーム)である。パリで法律家をしていた父親の末っ子として生れ、8歳で母を、10歳で父を失い、Canterburyの近くの聖職者である叔父に育てられた。この叔父はコ

セコセした凡庸な人物で、味気ない生活を送り、CanterburyにあるKing's Schoolで学ぶことになったが、生来の吃音(どもり)のために学友や教師にも嘲られて、その悔しさが彼のCanterburyの思い出に一生ついて回ったのである。『Of Human Bondage (人間の絆)』にもPhilip少年を主人公として足の不自由をからかわれる悔しさを描いているし、『Summing Up (要約すると)』でも語られている。Canterburyの思い出がEnglandの思い出の核となって、彼は殆どの人生を海外で過ごした。英国嫌いの英国人になったのである。

Chaucer(もっとも彼の作品は、この町の名を冠しているが、この町には到着していない。)、Dickens、Conrad、Maughamとこの町に関わる作家が多いが、何と言ってもDickensはよく知られている。Rochester, Chatham, Canterbury, Dover, Broadstairsと、Kent州はさながらDickens Landである。最後のBroadstairsには彼の別荘Bleak Houseがあり、この町の人達は、毎年6月下旬にDickens祭りを催し、その日一日をVictoria時代の服装で過ごす。Victoria時代は遠くだったが、Dickensの時代は永遠に続くであろう。

(札幌大学女子短期大学部教授)